

ISSN 1882-0468

ISSN-L 1882-0468

# NDL 書誌情報ニュースレター

## 2013年4号(通号27号)

### 目次

「書誌データ利活用説明会」開催報告 (収集・書誌調整課)	1
世界図書館・情報会議 ー第79回 IFLA 大会(シンガポール)報告 (収集・書誌調整課 大柴忠彦)	4
VIAF 評議会会議報告 (収集・書誌調整課 大柴忠彦)	9
オンライン資料と ISSN ー第38回 ISSN センター長会議参加報告 (逐次刊行物・特別資料課 増田利恵)	13
バーバラ・B. ティレット氏によるワークショップ「新しい知識と情報の組織化・RDA の 理念と実践」参加報告 (収集・書誌調整課 高野佳代)	16
第15回図書館総合展で全国書誌を紹介しました (収集・書誌調整課 吉村風)	18
お知らせ:日本図書館協会目録委員会と連携し、新しい『日本目録規則』を策定し ます (収集・書誌調整課)	20
お知らせ:録音・映像資料(クラシック音楽)の著者標目の採用数を拡大しました (逐次刊行物・特別資料課)	22
コラム:書誌データ利活用(2) ーダウンロードファイルのあれこれ (収集・書誌調整課 書誌サービス係)	23
掲載情報紹介	27

## 「書誌データ利活用説明会」開催報告

### 【はじめに】

[本誌前号](#)でお知らせしました「書誌データ利活用説明会」を、2013年11月1日に東京本館にて開催いたしました。この説明会は、現在、各図書館システムにおける全国書誌データの取込み機能（NDL サーチの API 利用、MARC 形式ファイルの取込み機能等）の実装が進みつつある中、全国書誌データのさらなる利活用を推進することを目的に行ったものです。

最初に当館から全国書誌提供サービスの概要を説明した後、渡辺起代子氏（埼玉県立上尾高等学校）、水上英俊氏（徳島県立図書館）、浜口正尚氏（国立国会図書館支部気象庁図書館）を講師としてお招きし、各館における全国書誌データの活用事例を報告していただきました。続いて、当館担当者からシステム実装のための方法について解説を行いました。

当日は図書館システムを開発するベンダーを中心に75名の参加があり、盛況のうちに終了しました。以下、概要を紹介します[1]。



説明会の様子

### 1. 国立国会図書館が提供する全国書誌提供サービスの概要 原井直子（国立国会図書館収集書誌部司書監）

全国書誌とは一般に「国の出版物について標準的な書誌情報を作成し、広く内外に提供するもの」ということができます。当館の全国書誌の提供方法としては、現在、[NDL-OPAC](#)、[国立国会図書館サーチ \(NDL サーチ\)](#)、[JAPAN/MARC](#) の頒布の三種類の方法があります。今後は、NDL-OPAC、NDL サーチからの提供が主要なサービスになると考えており、本日は主にその二種類について説明します。

また、2013年7月から収集を開始したオンライン資料[2]についても、来年4月から全国書誌データの提供を

行う予定です。さらに利活用促進のため、新しい API の提供や利用者ニーズの把握、利用者の支援を行うことを計画しています。

## 2. 全国書誌データの利活用事例

以下の三つの事例が報告されました。

### (1) 埼玉県立上尾高等学校の事例 渡辺起代子氏

埼玉県立上尾高等学校では、図書館システムを2006年に導入し、2012年からNDL-OPACの全国書誌データをダウンロードし、コピーカタログングを行っています。特に2013年10月以降、システムをバージョンアップしたところ、国立国会図書館の書誌検索画面を開かずに直接検索や登録ができるようになり、作業が効率的になりました。

全国書誌データを使用する理由としては書誌の正確さ、情報量、無償であることなどがありますが、一方でNDL-OPACの検索画面などで使いにくい箇所がある、書誌によってはデータ完成にタイムラグがあるなど問題点もあります。国立国会図書館には信頼できるデータ作成をお願いしたいと考えています。

### (2) 徳島県立図書館の事例 水上英俊氏

徳島県立図書館では1961年から国立国会図書館の印刷カードを採用し、1988年から既存資料の入力作業としてJAPAN/MARCの利用を始めました。現在は、流通資料の発注用としては日販マークを使用し、その書誌の補完と非流通資料の書誌作成のためにNDL-OPACの[全国書誌データ提供サービス](#)を利用しています。

徳島県立図書館のシステムは[JAPAN/MARC MARC21 フォーマット](#)に対応していないため、NDL-OPACからデータをダウンロードした後、[Web 変換サービス](#)を経由してJAPAN/MARC 2009フォーマットに変換し、図書館システムへの登録を行っています。今後の課題としては、JAPAN/MARC MARC21フォーマットへの対応や、新着書誌情報を市販マークの代用として使用できないか検討することなどがあります。

### (3) 国立国会図書館支部気象庁図書館の事例 浜口正尚氏

気象庁図書館では平成24年度以降、NDLサーチからAPIによる全国書誌データの取り込みを行っています。追加コストがかからないというのが非常に利点となり、国立国会図書館書誌データの利用に踏み切りました。また、図書館業務に携わったことのない職員が担当者となるケースも多くありますが、資料のISBNをバーコードで読み取り、データを取り込むという手順は専門外の担当者にもわかりやすいと感じています。

## 3. 全国書誌の利活用方法：システム実装のために 田村浩一(国立国会図書館収集書誌部収集・書誌調整課書誌サービス係長)

システム実装の具体的な方法として各種サービスの特徴を説明します。NDL-OPACでは、完成した書誌データを即時に提供しています。また、作成中の全国書誌データも利用可能というメリットがあります。しかしNDL-OPACからの利用の場合、書誌データをダウンロードした後、自館のシステムに取り込む作業が必要です。一方、NDLサーチでは、書誌データの提供はNDL-OPACの2日後となりますが、APIの利用により取込み作業の手間がかかりません。

今後はオンライン資料を含めた全国書誌データをウェブ環境に適したフォーマットで、NDL サーチから提供していく方針です。全国書誌データの活用と各図書館システムへの API 実装をお願いします。

## 【おわりに】

説明会の質疑応答では、NDL サーチからの新着書誌情報の取得方法、学校図書館における当館書誌データ対応システムの普及率に関する質問や、NDL-OPAC において ISBN の検索が簡単に行えることへの要望がありました。

説明会終了後の参加者へのアンケートでは、参加者の 72.5%の方が「満足」、「やや満足」という結果でした。また「MARC とシステムをどのように関連させるかが理解出来た」「ベンダー向けという趣旨は大いに評価します」などのご意見をいただき、おおむね好評な結果となりました。一方、「実装に関する具体的な説明をもっと聞きたかった」というご意見や「NDL デジタルアーカイブ」の今後の展開について、オープンデータへの取組み等の説明会をして欲しい」というご要望も寄せられました。

また、図書館システムベンダーを対象に、当館書誌データ取込み機能の実装についてのアンケートも行いました。後日、当館書誌データ取込み機能を実装している図書館システムの一覧を当館ホームページに掲載する予定です。

今回、自館での全国書誌データの活用について詳しく説明をしてくださった各図書館の方には、改めて感謝の意を表すとともに、多くのご意見をくださった参加者の皆様に御礼申し上げます。当館では、これからも全国書誌データのさらなる利活用を図るべく、説明会や広報などを行っていきたくと考えています[3]。

今後ともどうぞ当館の活動にご注目ください。

(収集・書誌調整課)

[1] 当館発表資料を、以下に掲載していますので、ご覧ください。

<http://www.ndl.go.jp/jp/event/events/20131101briefing.html> (2013 - 11 - 22 参照)

[2] インターネット等で出版(公開)される電子情報で、図書または逐次刊行物に相当するもの(電子書籍、電子雑誌等)をオンライン資料といいます。オンライン資料の収集制度については、以下をご覧ください。

[http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/online\\_data.html](http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/online_data.html) (2013 - 11 - 22 参照)

[3] 書誌データ利活用について、本誌前号、今号のコラムで連載しています。是非ご覧ください。

[http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo\\_8301273\\_po\\_2013\\_3.pdf?contentNo=1](http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_8301273_po_2013_3.pdf?contentNo=1)

[http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo\\_8379163\\_po\\_2013\\_4.pdf?contentNo=1](http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_8379163_po_2013_4.pdf?contentNo=1)

## 世界図書館・情報会議 一第79回 IFLA 大会(シンガポール)報告

### 【はじめに】

「世界図書館・情報会議 (WLIC) 一第79回国際図書館連盟 (IFLA) 大会」が2013年8月17日から23日にかけて、シンガポールで開催され、国立国会図書館から代表団13名が参加しました [1]。



大会会場の案内板

筆者は、2011年および2012年 [2] に引き続き、書誌分科会常任委員会へ常任委員として出席しました。また、関連する分科会の常任委員会へオブザーバとして出席し、書誌関連のオープン・セッションにも参加しました。以下に概要を報告します。

### 1. 書誌分科会常任委員会

委員会活動について、経過報告および今後の計画の検討等を行いました。委員長の交代があり、次期委員長にスウェーデンの図書館サービス会社BTJのアンダース・カトー氏 (Anders Cato) が選出されました。



書誌分科会常任委員会の様子

### (1) 全国書誌に関する指針

書誌分科会のおもな課題は、2009年に刊行した全国書誌に関する指針（収集書誌部訳『[デジタル時代の全国書誌：指針および新しい方向性](#)』）の改訂です。改訂版は“Best Practice for National Bibliographic Agencies in the Digital Age”というタイトルの下、指針に則した事例を集めて紹介し、全国書誌のLinked Open Data（LOD）としての提供を推進する方向で編集を進めています。また、改訂版は、冊子体ではなく、分科会のウェブサイトにオンライン資料として掲載します。常任委員会で担当委員から提示されたプレビュー版を基に、今後、内容を拡充していきます。

改訂版普及のためには各言語への翻訳が必要であると考えられますが、オリジナルがウェブサイト上のオンライン資料という動的なものになるため、翻訳作業が難しくなるとの意見を筆者が述べました。これに対して、翻訳のために定期的にウェブサイトの「スナップショット」を用意してはどうかという意見がありました。

### (2) “National Bibliographic Register”

書誌分科会では、各国の全国書誌の現況が簡便に把握できるように全国書誌作成機関からの情報をとりまとめ、分科会のウェブサイトに“[National Bibliographic Register](#)”（「全国書誌登録簿」）というページを設けて公開しています。ここには、日本の全国書誌についての情報も登録されています。前期は登録国数が36から44へ増加しましたが、今期は新規の登録がありませんでした。この登録簿は、全国書誌に関する指針とも密接に関係するものです。今後も未登録機関へ登録を呼びかけ、また、登録データの更新を進めていきます。

### (3) オープン・セッション

書誌分科会ではオープン・セッションを、今後の“Best Practice”における事例紹介へとつなげることも企図し、“Opening up the bibliography for the future”（「将来へ向けての書誌の開放」）をテーマに行いました。5本の発表のうち、4本が全国書誌に関するもので、インド、イラン、デンマークおよびボツワナ（発表者欠席）

からありました。この中ではデンマークの事例が最も興味深いものでした。LODとして提供する全国書誌を「核」として、そこに他のメタデータ、全文テキスト、画像、音声、映像等をリンクして提供していく“The Data Well”が紹介されました。

#### (4) ISBD 戦略

目録分科会が『国際標準書誌記述』(ISBD)の戦略について検討を進めています(2.(1)を参照)。目録分科会からの求めに応じて書誌分科会でもISBD戦略について議論しました。ISBDは、これまで日本の目録規則も含め各国の目録規則が準拠してきた標準ですが、その一方で、“Resource Description and Access”(RDA)が2010年に刊行されました。ISBDに準拠していないRDAが各国で採用されはじめ、事実上の国際標準となりつつある中、IFLAとしてISBDをどのような方向へ持っていくのかを討議しました。

#### (5) UBCに関する声明

昨年から書誌分科会を中心にまとめてきた国際書誌調整(UBC)に関する声明がIFLA Professional Committeeの承認を経て2013年2月にIFLAのウェブサイトに掲載されました。この声明は、UBCが実質的にIFLAのコア・プログラムではなくなったことに対して、UBCの重要性を訴えるものです。今期の活動の成果のひとつです。

2014年の大会における書誌分科会のオープン・セッションは、このUBCという観点をふまえて、目録分科会および分類・索引分科会と共同で“Universal Bibliographic Control and use and reuse of metadata”(「国際書誌調整およびメタデータの利用と再利用」)をテーマとして行う予定です。

## 2. 関連する分科会常任委員会

書誌分科会に深く関係する目録分科会および分類・索引分科会の常任委員会へオブザーバとして出席し、情報収集を行いました。

### (1) 目録分科会常任委員会

FRBR レビュー・グループからは、別々に刊行されてきたFRBR、FRADおよびFRSADの3モデル[3]の整理統合(Consolidation)作業の進捗について、昨年に引き続き報告がありました。また、これまで冊子体でしか入手できなかったFRAD英語オリジナル版がIFLAのウェブサイトに掲載されたこと、その翻訳が11言語になったことが紹介されました。日本語訳(収集書誌部訳『[典拠データの機能要件](#)』)が追加されたことも紹介されました。

「[国際目録原則覚書](#)」についても見直しを検討されていますが、これは大まかな原則であるため頻繁に見直す必要はなく、また、その構造自体は基本的に良いものであり、2009年公開以降に発展があった部分について見直していくという方向性が示されました。

ISBDに関しては、1.(4)で述べたとおり、その戦略が討議されました。議論となったのは、やはり、ISBDとRDAとの関係です。RDAはIFLAの外で策定され国際的な合意を得ていない、という意見がある一方で、RDAは国際目録原則覚書やFRBRといったまさにIFLAが国際的な合意を得て策定してきた原則等に則している、という意見がありました。もとより今年の大会で結論を出すべきものではなく、来年も継続して検討していきます。

なお、目録分科会は2014年大会(開催地:リヨン)のサテライト・ミーティングを、RDAをテーマにドイツ国立図書館(フランクフルト)で行います。

## (2) [分類・索引分科会](#)常任委員会

次期の活動計画に、これまで分科会では扱ってこなかったジャンル形式用語に関する検討が盛り込まれました。ジャンル形式用語については数年前から米国議会図書館が実施しています。また、同分科会主催のオープン・セッションでは、ドイツ国立図書館から小説および児童書へのジャンル形式用語適用に関する発表がありました。両館とも用語を典拠ファイルによってコントロールしています。今後、分科会からジャンル形式用語に関する指針等が示されるのか、注目したいところです。

なお、オープン・セッションでのドイツ国立図書館からの発表に対して、質疑応答の時間に、他の資料群(地図、音楽映像等)へのジャンル形式用語の適用計画はあるのか、と質問したところ、ドイツ国立図書館ではRDA適用を検討しており、その検討の中で他の資料群への適用についても考えていきたい、という回答でした。

## 3. [書誌関連オープン・セッション](#)

書誌関連のオープン・セッションにもいくつか参加して情報収集を行いました。書誌分科会および分類・索引分科会のオープン・セッションについては前述のとおりです。その他に、UNIMARC コア活動のオープン・セッションが興味を引きました。

[UNIMARC コア活動](#)のオープン・セッションは、“Expanding MARC metadata services with linked open data”(「LODによるMARCメタデータ・サービスの拡張」)をテーマに行われました。OCLCからLODの重要性を説く発表があり、また、フランス国立図書館からは、蔵書目録とデジタル資料とを統合的にLODとして提供するプロジェクト“data.bnf.fr”が紹介されました。この“data.bnf.fr”については、2012年大会の国立図書館分科会や目録分科会のオープン・セッションにおいても発表があり、フランス国立図書館がこのプロジェクトに力を入れて進めているのがうかがわれます。

OCLCからの報告では、米国議会図書館が開発を進めている新しい書誌フォーマットのモデルである [BIBFRAME](#) について少しだけ言及がありました。BIBFRAME とグーグルやヤフー等が進めている Schema.org とは相互補完的であるという説明でした。

セッション終了後、発表者のところへ駆け寄って、「相互補完的」について具体的な説明がなかったのももう少し説明してほしいと質問したところ、Schema.orgにもcreative work(図書や音楽など)のための語彙は用意されており一般にはそれで十分だが、図書館において書誌データを扱うためにはBIBFRAMEが必要になるであろう、という回答でした。

## 【おわりに】

UNIMARC コア活動のオープン・セッションにおいてさえMARCフォーマットではなくLODが扱われるように、ここ数年LODは、IFLAにおいて頻繁にとり上げられるテーマのひとつです。今年も含め三度参加した年次大会において、LODの実践・応用例についての発表が欧米諸国を中心にオープン・セッションで多く見られました。当館も

書誌および典拠データの LOD としての提供を進めていますが、LOD の技術的な側面だけにとられることは望ましくありません。

たとえば、フランス国立図書館によるプロジェクト“data.bnf.fr”は、そのバックグラウンドに典拠データがあります。すでに書誌データの LOD 提供を進めているドイツ国立図書館は、新たにジャンル形式用語の適用を開始しました。欧米の主要な国立図書館におけるさまざまな書誌データの提供の背後には、それを支える典拠データがあります。典拠データとは、書誌データに対する付加価値であるというよりも、むしろ書誌データを支える基盤そのものであり、その重要性についてあらためて痛感しました。

RDA は典拠データを重視していると言われていています。ISBD (International Standard Bibliographic Description) を考える場合には、「B」(Bibliographic) = 書誌の、だけでなく、典拠データをも含めての戦略が必要ではないか、ということを書誌分科会常任委員会で ISBD 戦略を討議しているときに発言すればよかった、と後から思いました。

大柴 忠彦

(おおしば ただひこ 収集・書誌調整課)

[1] 今回の大会プログラム、発表ペーパーの一部については、以下に掲載されています。

<http://conference.ifla.org/past/2013/programme-and-proceedings.htm> (参照 2013-11-22)

[2] 2011年の大会については本誌2011年3号(通号18号)にて、2012年については本誌2012年4号(通号23号)にて、それぞれ報告しています。

[http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo\\_3192139\\_po\\_2011\\_3.pdf?contentNo=1](http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_3192139_po_2011_3.pdf?contentNo=1)

[http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo\\_4059584\\_po\\_2012\\_4.pdf?contentNo=1](http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_4059584_po_2012_4.pdf?contentNo=1)

[3] FRBR (Functional Requirements for Bibliographic Records)、FRAD (Functional Requirements for Authority Data)、FRSAD (Functional Requirements for Subject Authority Data)

## VIAF 評議会会議報告

### 【はじめに】

IFLA 大会前日の 2013 年 8 月 16 日、同じくシンガポールで開催されたバーチャル国際典拠ファイル (VIAF) 評議会会議へ出席しました。2012 年 10 月に [VIAF](#) に参加した当館は評議会のメンバーです [1]。会場はシンガポール国立図書館と同じ建物の中にあるシンガポール中央公共図書館でした。以下に概要を報告します[2]。

まず、議長選挙があり、次期議長はブリギッテ・ヴィーヒマン氏 (Brigitte Wiechmann、ドイツ国立図書館) が予定どおり務めることとなりました。また、議長候補 (兼副議長) には、今期議長のヴァンサン・ブレ氏 (Vincent Boulet、フランス国立図書館) が選出されました。



シンガポール国立図書館

### 1. 活動報告

#### (1) OCLC からの報告

まず、VIAF を主管している OCLC から報告がありました。VIAF 参加機関数は 2013 年 7 月末現在で 28 か国 34 機関 (OCLC を含む) となり、この 1 年間では 12 機関の参加がありました (当館が新たに参加したことも報告されました)。VIAF の典拠レコード件数は 3,300 万件、クラスター[3]数は 2,400 万件となりました。

システム面では、典拠データの同定メカニズムが改善され、また、データベースの調整を行い更新速度が速くなりました。データの内容面では、典拠種類の拡充 (地名典拠の充実、ミッキーマウス等のフィクション・キャラクター名の収録) について引き続き検討を進めています。

ユーザー・インターフェイスは、ドイツ語、フランス語、スペイン語および日本語に翻訳されました。なお、

この日本語版インターフェイスの作成には当館が協力しました。

## (2) ワーキング・グループからの報告

評議会の下に設置された二つのワーキング・グループから報告がありました。

プライバシー問題を扱うワーキング・グループでは、個人名典拠における筆名・本名の扱い方について、参加機関にアンケート調査を行いました。調査結果については整理中ですが、当然のことながら、扱いは機関によってさまざまであることが判明しました。会議出席者からは、むしろ、個人名典拠における生年の公開が問題になることが多いとの発言が相次ぎ、日本でも同様であることを付け加えました。

アドヴォカシーを扱うワーキング・グループでは、ウェブサイトを変更して VIAF について広く周知していくための一環として、同じく参加機関にアンケート調査を行い、各機関が VIAF に提供する典拠データ等の概要を集約しました。評議会後、集約した概要が VIAF のウェブサイトに掲載されました [4]。

## 2. 今後の課題及び方向性

### (1) ISNI との連携

VIAF は [ISNI \(International Standard Name Identifier 創作者等の名称に関する国際標準識別子\)](#) との連携を進めています。ISNI の割当てに VIAF のデータが活用されており、ISNI の品質管理において VIAF における誤同定等が判明し、VIAF データの改善にもつながっています。VIAF と ISNI ではデータの対象となる範囲が異なり、また、VIAF が典拠データ自体を表示提供する一方、ISNI は ID のみを提供しています。したがって、VIAF と ISNI は相補的な関係にあると言えます。ISNI との連携は今後も継続していきます。

### (2) WorldCat との連携

統一タイトル典拠のデータ処理に、OCLC [WorldCat](#) の書誌データを活用し、改善・強化を図っていきます。特に翻訳書のデータを活用し、VIAF における統一タイトル典拠の多言語表示を増やせば、FRBR でいう「著作」と「表現形」との関係を豊富に示すことができ、VIAF が書誌データの FRBR 化 (FRBRization.) のツールとなる可能性もあります。

## 3. アジアにおける典拠データの活用事例

シンガポール開催に合わせ、アジアにおける典拠データの活用事例として、シンガポール国立図書館および当館から報告を行いました。

シンガポール国立図書館では、Knowledge Organization Systems (KOS) Project の下、公用語 4 言語によるソーラス用語を維持管理し、また、タクソノミー (分類体系) とのマッピングを進めています。今後は、Linked Data Management Platform を開発し、Linked Data による提供の計画もあるそうです。

当館からは、「Web NDL Authorities and VIAF」と題して、当館の典拠データについて、その背景、[Web NDL Authorities](#) による提供および Web NDL Authorities と VIAF の相互リンクという内容で発表を行いました。



当館からの発表の様子

#### 【おわりに】

会場に到着後、評議会議長や OCLC 担当者から、当館が VIAF に参加したことについて感謝の言葉がありました。東アジアから初めての参加ということで、当館の VIAF 参加は大いに意義のあることだと思われま

す。アジア諸国からの VIAF への参加は少なく、今後多くの参加が望まれる中で、当館には中心的な役割が求められるでしょう。今回、シンガポールでの評議会会議開催に合わせて、議長は VIAF 未参加のアジア諸国に対して会議への参加を呼びかけました。残念ながらアジアから多くの出席は見受けられませんでした。それでも、当館の典拠データについて、評議会会議の場で発表できたことはとても良い機会でした。会議後、マレーシア国立図書館（VIAF 未参加）の副館長から発表資料を送ってほしいとのお話があり、当館からの発表は会議参加者へ少なからぬ印象を与えたものと思われま

大柴 忠彦

(おおしば ただひこ 収集・書誌調整課)

[1] 当館の VIAF への参加ならびに VIAF および VIAF 評議会の概要については、本誌 2012 年 4 号 (通号 23 号) から 2013 年 2 号 (通号 25 号) までの連載記事「典拠の国際流通 ―バーチャル国際典拠ファイル (VIAF) への参加」にて紹介しています。

[http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo\\_4059584\\_po\\_2012\\_4.pdf?contentNo=1](http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_4059584_po_2012_4.pdf?contentNo=1)

[http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo\\_8103221\\_po\\_2013\\_1.pdf?contentNo=1](http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_8103221_po_2013_1.pdf?contentNo=1)

[http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo\\_8226998\\_po\\_2013\\_2.pdf?contentNo=1](http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_8226998_po_2013_2.pdf?contentNo=1)

[2] 会議の議事録、発表資料等は、以下に掲載されています。

<http://www.oclc.org/events/2013/viaf-at-ifla.en.html> (参照 2013-12-11)

[3] 各言語の典拠レコードの標目形を維持しながら提供されるひとかたまりのレコード。

[4] VIAF のウェブサイトに掲載されている各機関名をクリックすると、その機関の典拠データ等の概要が表示されます。

## オンライン資料と ISSN — 第 38 回 ISSN センター長会議参加報告

ISSN (国際標準逐次刊行物番号) ネットワークには 88 か国が参加しています。その ISSN ネットワークのセンター長会議が、2013 年 10 月 22 日から 25 日までの 4 日間開催されました。センター長会議は毎年行われ、ISSN 付与に関する実務方針などを検討しています。今回は、ルーマニアのブカレストにあるルーマニア国立図書館が会場となり、ISSN 国際センターをはじめ、34 か国の 43 名が会議に参加しました。日本からは [ISSN 日本センター](#) である国立国会図書館が参加しました。議事内容を報告します。



ルーマニア国立図書館

### 【ROAD (Directory of Open Access Scholarly Resources) の開始】

ROAD は、ISSN 国際センターが計画を進めているオープンアクセスの学術資料のポータルで、ISSN の知名度を増すことを目的の一つとしています。ROAD のプロジェクトは、2013 年 4 月末の ISSN 国際センターの理事会で承認されました。ROAD は、ユネスコの協力を得て、2013 年 12 月 16 日にベータ版の立ち上げを予定しています。ROAD では、学術的な内容のオンライン資料のうち、オープンアクセスが保障されているものについて、ISSN 書誌データを無償で公開します。

今回の会議で、収録対象資料や収録対象を識別するためのコードについて議論され、ROAD の収録対象は、学術雑誌、学術リポジトリ、会議録に決まりました。ISSN 付与方針についても議論があり、これまでもデータベースは ISSN 付与の対象でしたが、今回学術リポジトリも対象とすることに決まりました。

ROAD の収録対象となる ISSN 書誌データへの識別コード付与は、会議での決定を受けて 2013 年 10 月から開始することになりました。ISSN 日本センターでは ISSN センター長会議での議論を踏まえて、ROAD の収録対象資料の条件等の運用を検討していく予定です。



ルーマニア国立図書館の内部

#### 【ISSN マニュアルの改訂案】

ISSN ネットワークには、[ISSN マニュアル\[PDF File 2.68MB\]](#)、ISBD（国際標準書誌記述）と [RDA \(Resource Description and Access\)](#) との調整事項等について検討する ISSN レビューグループがあります。ISSN レビューグループから提示された ISSN マニュアルの改訂案の中からご紹介します。

##### (1) 逐次刊行物の本タイトルの重要な変化

[前回の会議](#)において、本タイトルの最初の 5 語に変更があった場合は重要な変化とみなすという現行の規則は変更せず、分かち書きをしない言語について、新しい規則を提案することが了承されました。今回の会議の前に、本タイトルの重要な変化の規則に関して、分かち書きをしない日本、中国、韓国、タイに意見聴取がありました。その結果をふまえ、ISSN レビューグループからは、分かち書きをしない言語に配慮し、本タイトルの変更の規則を ISBD（国際標準書誌記述）の規則に合わせると報告がありました [1]。[JSC \(Joint Steering Committee for Development of RDA\)](#) にも ISBD の文言を提案するとのことでした。

##### (2) オンライン版には一つの ISSN の方針

[前回の会議](#)において各種オンライン版への ISSN 付与の暫定方針について議論があり、原則としてオンライン版には一つだけ ISSN を付与するという方針が了承されました。ISSN レビューグループで検討の結果、ISSN レコードは一つのオンライン版についてのみ記述をするが、関連する全てのオンライン版の識別子として使用される、という文言が加えられ、さらに各種オンライン版の情報を記録できるよう規定が設けられました。

オンライン版には一つだけ ISSN を付与するという方針の例外として、次の 2 つが挙げられました。

- 1) オンライン版の表現種別が異なる場合（例：音声版とテキスト版）

2) 別のオンライン版の内容が著しく違っていて、別の版とみなせる場合



会議風景

今回の会議ではオンライン資料が話題の中心となりました。この他、PRESSoo[2]の紹介と進捗状況の報告がありました。[BIBFRAME](#)のプレゼンテーションも行われました。

次回のISSNセンター長会議は、2014年9月にトルコのイスタンブールで開催予定です。

増田 利恵

(ますだ りえ 逐次刊行物・特別資料課)

[1] Recommended by the ISBD Review Group ; approved by the Standing Committee of the IFLA Cataloguing Section. ISBD : International Standard Bibliographic Description. Consolidated ed., Berlin ; Boston, De Gruyter Saur, c2011, 284 p.

[2] PRESSooについては、本誌2013年2号(通号25号)で紹介しています。

[http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo\\_8226998\\_po\\_2013\\_2.pdf?contentNo=1](http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_8226998_po_2013_2.pdf?contentNo=1)

## バーバラ・B. ティレット氏によるワークショップ

### 「新しい知識と情報の組織化：RDA の理念と実践」参加報告

2013年9月5～6日、東京都新宿区の学習院女子大学にて行われたワークショップ「新しい知識と情報の組織化：RDA の理念と実践」に参加しました。両日とも午前9時から午後5時まで、びっしりとつまったスケジュールで、質疑応答も非常に活発に行われ、とても実り多い二日間となりました。

このワークショップは、バーバラ・B. ティレット氏 (Barbara B. Tillett) が [Joint Steering Committee for Development of RDA](#) (RDA 開発合同運営委員会) の仕事の一環として、専門的立場からの指導者を養成する目的で、世界各地で開催しているセミナーに準じたもので、“[Resource Description and Access](#)” (RDA) の背景にある理念およびその応用について、講義と演習から構成されていました。テキストは、LC の RDA トレーニング資料 ([Library of Congress \(LC\) RDA Training Materials](#)) を訳して、日英併記したもので、演習部分は [LC-PCC \(Library of Congress-Program for Cooperative Cataloging\)](#) や MARC フォーマットの使用が前提になっていました。RDA には「何を記録するか」は書かれていますが、MARC フォーマット上のどのフィールドに記載するかは定められていないので、RDA の説明を聞いただけで演習問題を解くのは困難でした。なお、MARC フォーマットに代わる、RDA のためのデータ・スキーマを、他のメタデータ・コミュニティと連携して検討中であり、2014年には発表する予定であるとのことでした。

“Anglo-American Cataloguing Rules, Second Edition” (AACR2) に対する「論理的でない」という批判に対応したのが RDA であるとのこと、AACR2 と RDA の一番の違いは、論理的な構造と国際的なモデルを導入したことだとおっしゃっていて、実務はそう変わらないと説明されました。例えば従来「団体著者標目」として規定されていたもの (AACR2 第24章 団体に対する標目) について、RDA では、「資料と団体の関連の記述」という考え方を導入したことが新しいのであって、団体をクリエイターあるいは寄与者と捉えたあとの作業は AACR2 と変わらないとのことでした。

欧米での記述目録作業は、目録対象資料のスキャニングや出版者由来のデータをベースに行っているという前提があり、ティレット氏が何度も繰り返して唱えられた「Take what you see (見たまま採用せよ)」という転記の原則は、スキャンデータを直さなくていいという意味で、カタログガーの負担を軽減する意図があるようです。また、[RIMMF](#) という無料ツールが紹介され、入力作業の省力化のためには、このような RDA 対応システムも役立つと説明されました。

ティレット氏は長年、RDA の根底にある概念モデル『[書誌レコードの機能要件](#)』 (Functional Requirements for Bibliographic Records : FRBR) の策定や [バーチャル国際典拠ファイル \(Virtual International Authority File: VIAF\)](#) 立ち上げに関わってこられた方であり、それらの説明もありました。VIAF については2003年、2005年にも当館で講演していただいています[1][2]。「伝道師」のごとく自ら出向いて説明することを怠らず、カタログガーの仕事が少しでも楽になるように、そして、その仕事の成果が、図書館の枠内にとどまらず、広くウェブの世界

に還元されるようにという想いをこめて今日まで邁進されてきたことが、ワークショップ全体を通じて印象に残りました。

高野 佳代

(たかの かよ 収集・書誌調整課)

[1] 上保佳穂. デジタル環境における目録作成-バーバラ・B・ティレット米国議会図書館目録政策・支援室長講演会報告-. 国立国会図書館月報, 2002. No. 496, p. 20-25

[2] 鈴木智之. バーチャル国際典拠ファイルと国際目録規則-米国議会図書館目録政策・支援室長バーバラ・B・ティレット博士講演会報告-. 国立国会図書館月報. 2005, No. 532, p. 20-25.

## 第15回図書館総合展で全国書誌を紹介しました

筆者は、2013年10月31日、神奈川県横浜市のパシフィコ横浜にて行われた『[第15回図書館総合展](#)』（2013年10月29日～10月31日開催 主催：図書館総合展運営委員会）にて、[全国書誌](#)を広く知って、利用していただくための簡単なプレゼンテーションを行いました。

図書館総合展とは、全国の図書館や図書館関係者・企業が集まり、図書館に関するさまざまなフォーラムやプレゼンテーション、ブース出展等を行う展示会です。

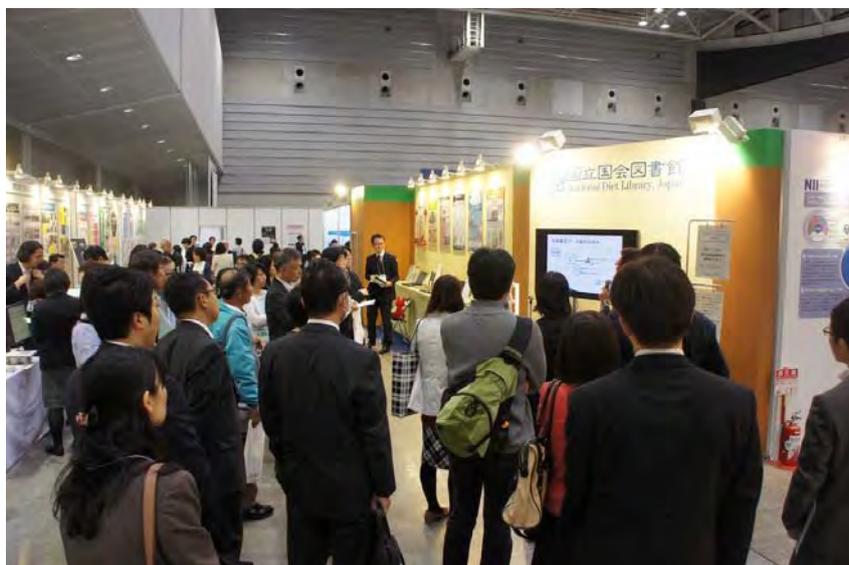
国立国会図書館でも「ここが図書館情報の最前線!!—情報を未来につなげるカレントアウェアネス・ポータル」と題したフォーラムや、国際子ども図書館のリニューアルに関するポスターセッションを行うとともに、国立国会図書館の各種サービスに関するブース展示を行いました。ブースでは[国立国会図書館サーチ](#)や[NDL 東日本大震災アーカイブ（ひなぎく）](#)などの当館のサービスをパネル展示によって説明したり、実際にパソコンでサービスを使っていたりしました。また、「[図書館向けデジタル化資料送信サービス](#)」「[カレントアウェアネス・ポータル](#)の紹介」といった当館のサービスの紹介や、[電子展示会](#)と企画展示「名勝負!!」の案内など25分程度のプレゼンテーションを行いました。

全国書誌についての紹介も、ブースでのプレゼンテーションの一つとして行いました[1]。国内出版物の網羅的書誌として全国書誌を紹介し、

- ・非流通資料もおさめられている
- ・図書館での利用の場合、データの利用は原則無償である
- ・新着書誌情報（作成中の全国書誌データ）も提供している

といった、全国書誌のデータとサービスの特徴を紹介しました。

また、市立図書館、学校図書室、博物館の資料室など各地で実際に使用されている導入事例をお伝えし、最後に全国書誌データの入手方法を説明しました。



全国書誌についてのプレゼンテーションの様子

20名程度の来場者が足を止めて聞いてくださいました。「全国書誌について概要を知ることができた」「検索して全国書誌データをダウンロードする方法をもっと詳しく知りたい」といった反響もあり、プレゼンテーションは好評でした。

吉村 風

(よしむら かせ 収集・書誌調整課)

[1] プレゼンテーション資料を、以下のページに掲載しています。

[http://www.ndl.go.jp/jp/news/fy2013/1203373\\_1828.html](http://www.ndl.go.jp/jp/news/fy2013/1203373_1828.html) (参照 2013 - 11 - 22)

## お知らせ:日本図書館協会目録委員会と連携し、

### 新しい『日本目録規則』を策定します

国立国会図書館収集書誌部(以下「当館」)は、2013年10月、[日本図書館協会目録委員会](#)(以下「目録委員会」)と連携し、“[Resource Description and Access : RDA](#)”に対応した新しい『日本目録規則』の策定に向けた作業を開始しました[1]。

この新規則に関する方針について確認した内容は、同年8月22日、「[『日本目録規則』改訂の基本方針](#)」として両者連名で取りまとめました。同年9月30日、この基本方針と合わせて、経緯や連携の概要を補足するために、当館は、「[新しい『日本目録規則』の策定に向けて](#)」[2]、目録委員会は、「[『日本目録規則』改訂におけるNDLとの連携について](#)」をそれぞれのホームページで公表しました。

当館は、「[国立国会図書館の書誌データ作成・提供の新展開\(2013\)](#)」[3]において、RDAに対応した書誌データの作成基準を定めるとしていました。一方、目録委員会は、2010年から『日本目録規則』の全面的な改訂作業に取り組んでいました。当館は、日本国内で共通に適用できる規則を作成するという考えの下に、『日本目録規則』の全面改訂作業を連携して実施することを、目録委員会に提案しました。その後、両者の間で意見交換を重ねて、上記基本方針を確認し、連携作業が始まりました。

新しい『日本目録規則』案の作成過程は、まず先行して検討された目録委員会案を基に当館案を作成し、さらに両者の間で調整を図って、成案としていくという手順になっています。

当館は第一に、事実上の国際標準であるRDAに対応した規則とすることを基本的な考え方として検討しています。一方、RDAに規定のない「読み」等の日本語の特性に対応することは、重要な課題です。また、日本の目録慣行や出版事情を考慮することに加え、当館が日常的にさまざまな資料の書誌作成を行っている経験からも、日本国内で共通に適用でき、実務上使いやすい規則とすることを目指しています。

作成した新規則案は、平成27年度の公開を見込んでいます。この案については、広くご意見をいただき検討する機会を設け、また試行データの作成を通じて修正を加え、完成してまいります。

新しい『日本目録規則』は、平成29年度の完成、公開を予定しています。

(収集・書誌調整課)

[1] 『カレントアウェアネス-E』No. 248, 2013. 11. 7でも紹介しています。

<http://current.ndl.go.jp/e1496> (参照 2013 - 11 - 22)

[2] 当館ホームページ「書誌データの基本方針と書誌調整」の中の「新しい『日本目録規則』の策定について」に掲載しています。

<http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/kihon.html> (参照 2013 - 11 - 22)

[3] 内容の説明については、本誌 2013年2号(通号25号)に掲載しています。

[http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo\\_8226998\\_po\\_2013\\_2.pdf?contentNo=1](http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_8226998_po_2013_2.pdf?contentNo=1)

## お知らせ:録音・映像資料(クラシック音楽)の著者標目の採用数を拡大しました

国立国会図書館では、国内刊行録音・映像資料のうち、クラシック音楽の書誌データについて、2004年3月22日以降、主たる作曲者1名を著者標目として採用してきました。

このたび、2013年10月以降に作成する書誌データについて、著者標目の採用を拡大することとし、標目の数を作曲者3名までとしました。資料の検索にご活用ください。

(逐次刊行物・特別資料課)

## コラム:書誌データ利活用(2) —ダウンロードファイルのあれこれ

[前号](#)で全国書誌データを利用するためのさまざまな機能を紹介しましたが、本号ではNDL-OPACからダウンロードしたファイルの活用方法についてご紹介します。

### 1. NDL-OPAC からのダウンロード

最初に、[NDL-OPAC](#)からファイルをダウンロードする流れ(図1参照)について、簡単にご紹介します。ファイルのダウンロードは、検索結果一覧画面又は書誌情報画面から行えます。検索結果をまとめて取得するときは、検索結果一覧画面からダウンロードされることが多いのではないのでしょうか。また、全国書誌データをまとめてダウンロードする場合は、全国書誌提供サービス画面において日付で絞り込んでから検索結果一覧画面に遷移し、ダウンロードを行います。

#### <各種検索画面>

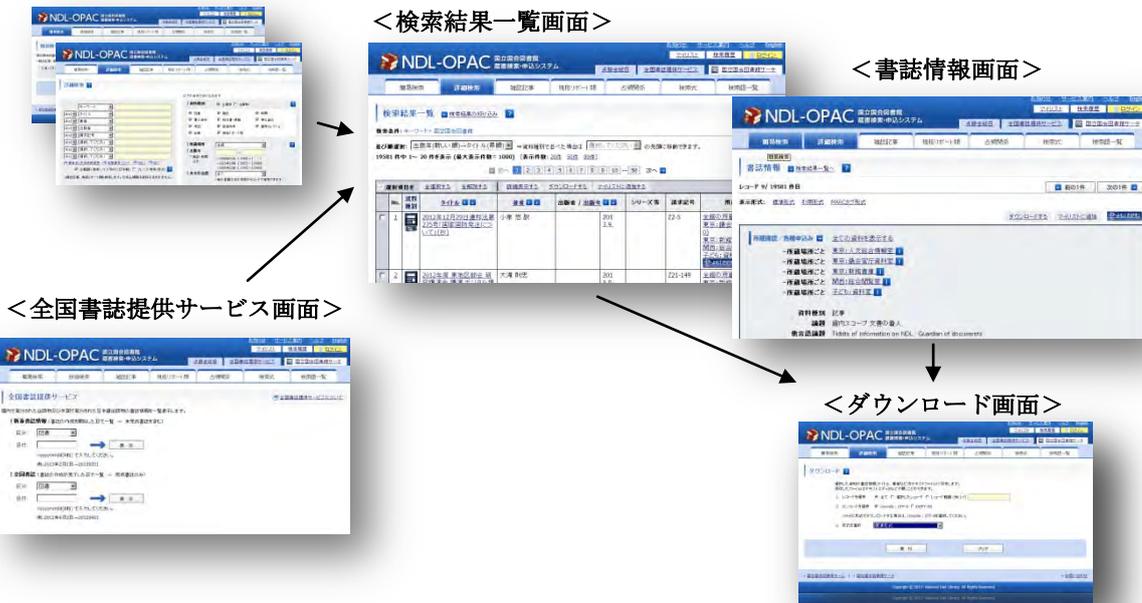


図1 ファイルダウンロードまでの流れ

ダウンロードを行う際のご注意として、一度に大量の書誌データをダウンロードしたときにダウンロードに時間がかかったら、項目の表示順などが壊れる場合(例えば、出版者の項目で出版地と出版者の順序が入れ替わる等)があります。その際は、件数を減らしたり(1,500件未満を推奨)、改めてダウンロードしなおしたりしてください。また、当館の書誌データはunicodeに対応していますので、SHIFT-JISでダウンロードした場合、SHIFT-JISコードを持たない文字は削除されて詰められます。

ダウンロードする[ファイル形式](#)は、全部で6種類あります。利用目的に合わせて形式を選択し、ダウンロードします。

#### (1) 標準形式

- (2) 引用形式
- (3) MARC タグ形式
- (4) MARC 形式
- (5) ALEPH シーケンシャル形式 (ASF)
- (6) 記号区切り形式 (\$ 区切り)

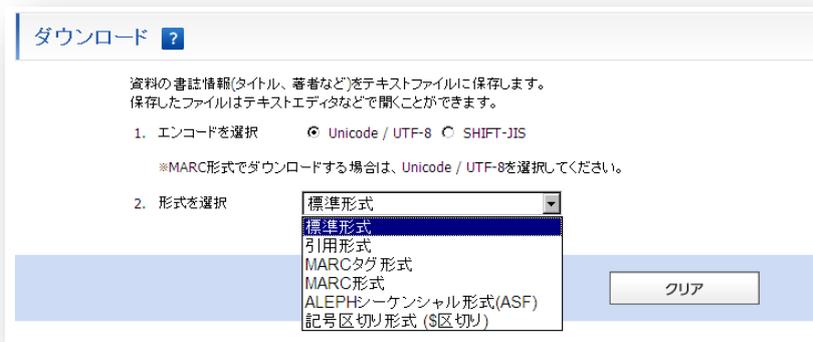


図2 ファイル形式の選択 (ダウンロード画面)

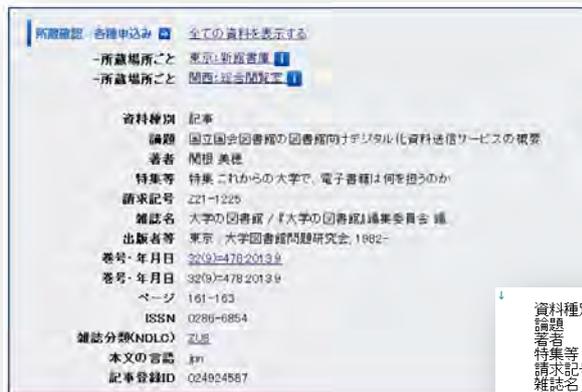
それでは、ダウンロードファイルの幾つかを見てみましょう。

## 2. 標準形式

標準形式は、図3のように画面表示 (標準形式) とダウンロードファイルがほとんど同じ内容です (MARC タグ形式も画面表示 (標準形式) とダウンロードファイルがほとんど同じ内容です)。

標準形式は、画面表示を意識した内容になっていますので、ファイルの内容を見て理解しやすいことが特徴といえます。そのため、標準形式から一覧リストを作成したり、データの一部を抽出したりするなどの利用にはあまり向きません。手間がかかりますので、データ処理を行う簡単なプログラム、Excel のマクロなどを活用するしかありません。

### < 書誌情報画面 >



### ダウンロードファイル (メモ帳で表示) >

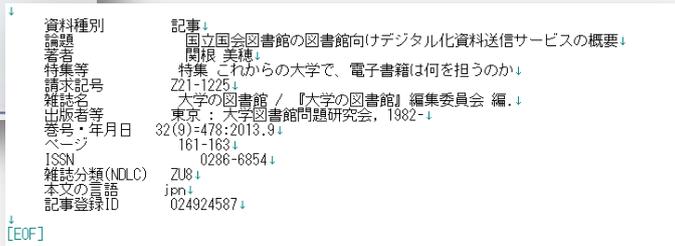


図3 書誌情報画面と標準形式のダウンロードファイル

### 3. MARC 形式

図4をご覧ください。明らかに、MARC形式は、利用者が中身を確認して内容がすぐにわかるような形式ではありません。これは、コンピュータがデータを処理する形式なのです。データの前半に数字で表現されているレコードラベル部とディレクトリ部が存在し、後半に実際の書誌データが格納されています。データ中の黒四角(■)はフィールドの区分文字(バイナリコード)です。また、ファイル中に改行コードはありませんので、全体が1行で表現されます(図4では、画面右端で折り返す表示)。

データの中身はなんとなくわかりますが、数字で表現された部分と書誌データの部分を組み合わせないと、どのような項目のデータなのか明確にはわかりません。MARC形式は、[JAPAN/MARC形式](#)を取り込める図書館システムなどでの利用に限定されます。

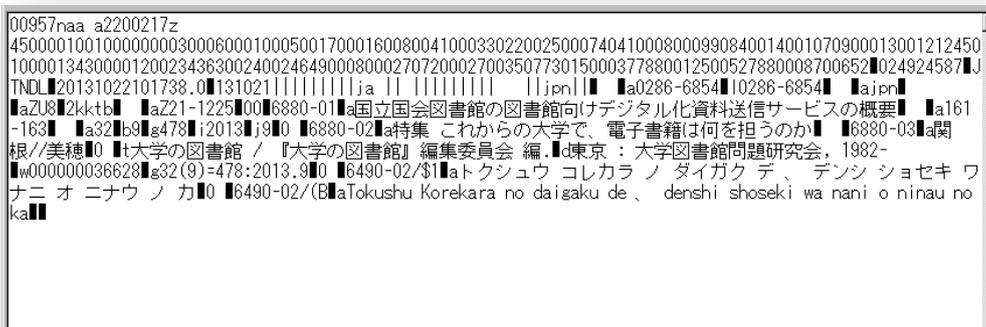


図4 MARC形式のダウンロードファイル(メモ帳で表示)

### 4. 記号区切り形式(\$区切り)

記号区切り形式(図5参照)は、書誌データのリストを作成するときなどにお使いいただけます。書誌データの内容はおおむね必要な情報が揃っています。区切り記号が「\$」というところで、違和感を持たれるかもしれません。

Excelで利用する場合は、Excelでダウンロードしたファイルを開き、区切り方を選択してから表示させます。書誌データ中に改行コードがあると行が変わり、繰り返し項目等によりデータの表示位置がずれます。図6を見ると、出版事項(網掛け箇所)の表示された列が異なっていることがわかりますので、利用の際には注意が必要です。

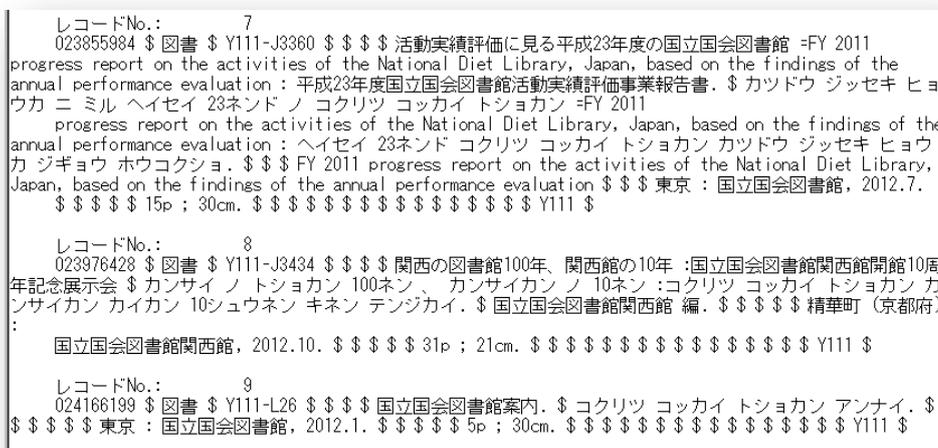


図5 区切り記号形式(\$区切り)のダウンロードファイル(メモ帳で表示)

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O						
1																					
2																					
3	レコードNo.:		7																		
4	23855984	図書	Y111-J83						活動実績	カドウ	ジッセキ	ヒョウカ	ニ	ミル	ヘイセイ	23ネンド	ノ	コクリツ	コッカイト	ショウカン	=FY 201
5	progre			FY 2011					東京: 国立国会図書館, 2012.7.												
6								15p; 30cr													
7																					
8	レコードNo.:		8																		
9	23976428	図書	Y111-J84						関西の図	カンサイ	国立国会									精華町(京都府):	
10	国立国							31p; 21cr													
11																					
12	レコードNo.:		9																		
13	24166199	図書	Y111-L26						国立国会	コクリツ	コ									東京: 国	
14																					
15	レコードNo.:		10																		
16	24166183	図書	Y111-L27						国立国会	コクリツ	コ										東京: 国
17																					
18																					

図6 Excelで表示した場合

## 5. おわりに

NDL-OPACでは6種類のファイル形式から目的に合わせて書誌データをダウンロードし利用することができますが、ダウンロードファイルをそのまま簡単にご利用いただけるわけではありません。また、図書館で、書誌データをシステムに取り込んで利用する際には、『ファイルをダウンロードする。』という手間をかけてから取込み処理を行うこととなります。できれば、その手間を省きたいものです。

今回は、テーマを変えて、[Web NDL Authorities \(国立国会図書館典拠データ検索・提供サービス\)](#)をご紹介します。

(収集・書誌調整課 書誌サービス係)

## 掲載情報紹介

2013年9月27日～2013年12月24日に、国立国会図書館ホームページに掲載した書誌情報に関するコンテンツをご紹介します。

- ・ [国立国会図書館分類表 \(NDLC\) を更新しました。](#) (掲載日：12月10日)
- ・ [11月1日金曜日に開催した「書誌データ利活用説明会」の資料を掲載しました。](#) (掲載日：11月12日)
- ・ [日本図書館協会目録委員会と連携して、RDAに対応した新しい『日本目録規則』を策定します。](#) (掲載日：9月30日)

**NDL 書誌情報ニュースレター (年4回刊)**

2013年4号(通号27号) 2013年12月25日発行

編集・発行 国立国会図書館収集書誌部

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1

E-mail: [bib-news@ndl.go.jp](mailto:bib-news@ndl.go.jp) (ニュースレター編集担当)